

研修生時代から  
独立後までも  
フォローアップ中



イラストは、JA全農TAC推進課と地上編集部とによるコラボキャラクター「TACマン」

### JALまねいわみ中央地区本部

島根県の西部に位置し、浜田市と江津市の2市を管内としている。水稲をはじめ、カキやブドウ、ナシといった果樹に加え、ウシヤブタ、シイタケの生産が盛んに行われている。現在は、2人のTACが月に80人の担い手を訪問している。

### point1

#### 受け入れ農家もしっかり支える

藤若さんのように、研修生の受け入れ先はもともとTACの訪問先であることが多い。15年には、研修生が受け入れ先の農地を継承するさい、TACが間に入り、税負担の軽減策や各種支援制度の活用を提案し、両者が納得できるかたちで話をまとめた。日々の訪問活動で両者との関係を深めているTACの強みを発揮した。



### point2

#### 組織への加入を促し、仲間づくりの場を提供

Iターンの就農者には、農業経営や資材購入の相談に乗るだけでなく、JA青年組織や生産部会などに誘うことで、仲間づくりや営農技術を高める場を提供。勉強熱心なIターン者は、研修生時代からの信頼関係もあるため、加入するケースが多いという。

# 担い手と共に新規就農者をサポート 一人前の農業者へステップアップ!

島根県 JALまねいわみ中央地区本部

松尾 純=写真 photo by Jun Matsuo JA全農TAC推進課=企画協力



高齢化が進む中山間地域で、担い手として期待されるのがIターンの新規就農者だ。彼らを担い手とも連携して地域に根づかせようと、TAC（地域農業の担い手に向くJA担当者）が奮闘するJAを訪ねた。



右から森脇さん、西川さん、藤若さん。JA青年組織の事務局も兼務する森脇さんの誘いにより、加入したのが藤若さんだ。「ゆくゆくは西川君も青年組織に入り、地元の仲間を増やすだけでなく、県や全国の農業者ともつながって視野を広げてほしい」と藤若さんは話す

J A全農がT A Cの取り組みをスタートさせたのは、二〇〇八年のこと。同年、全国に先駆けてT A Cを設置した島根県J Aいわみ中央(現・J Aしまねいわみ中央地区本部)は、これまで多くの担い手の悩みを聴き、解決に努めてきた。たとえば、近年ブルーベリーの生産者が増えてきているが、J Aでは共販を行っていないため、生産者の出荷先は直売所に限られ、競合で売れ残りが発生していた。そこで、T A Cが市場との間に入り、四人の生産者を市場出荷へと導いた。ほかにも、所得向上と鳥獣害対策のため、ジャンボニンニクの生産を提案するなど、担い手の経営改善に貢献してきた。

「営農以外の要望も聴くように心がけ、さまざまな角度から農業を行いやすい環境づくりに努めています」と話すのは、J Aしまねいわみ中央地区本部のT A C・森脇宏道さん(52)。女性のT A Cが、担い手の妻たちから「女性同士で農業の悩みを共有できる場がほしい」との声を聞き、一〇年に農家の妻の組織「うーる・ままん」を設立。視察旅行に行き、農業祭りで出店するなど、彼女たちの心のよりどころをつくった。また、J Aしまねが一四年から開始した、J A厚生連所有の人間ドック検診車を利用した「担い手巡回人間ドック検診」

ん(38)だ。大阪で開催された就農相談会「新・農人フェア」で、島根県の職員に誘われたことがきっかけで浜田市を訪れ、研修を始めて一年半がたつ。「見知らぬ土地で暮らすことに不安はありましたが、藤若さんが熱心に営農技術を、森脇さんがJ Aや農家経営にまつわることを教えてくれるので、新規就農へのイメージがわいてきました」

T A Cは研修生を対象に毎年、自動車の大型特殊免許を取得するための講習会を開き、複式簿記や青色申告を学ぶ「経営管理能力向上研修会」も行政と共同で開催。受講した研修生は免許を取得し、農業経営の基礎知識も学んで、就農へのステップアップが図れている。

その土地に人脈のない研修生は、横のつながりを広げにくい。そこで、T A Cは研修生同士が集まる機会をつくり、視察研修を計画したり、地域の指導農業士との意見交換の場をつくったりした。孤立しがちな研修生のフォローも欠かさないのだ。

「当初は、漠然と農業をしたいとは思っていませんでした。でも今は、この地でブドウ農家として生計を立て、自分が成功モデルとなる。そして、農家を志す人を呼び込み、ブドウの一大産地をつくるという目標ができました」と、一年半後を予定している独立と

を周知・推進して、より多くの担い手が健康診断を受けられるようにした。

### 研修生の交流の場をつくる

農家の高齢化が著しい中山間地域で、担い手として期待されているのがIターン就農者だ。T A Cは、行政や農業委員会といった関係機関と連携して、Iターン者に研修の受け入れ先をあっせんし、就農するさいも農地の取得や青年就農給付金などの各種制度を有効に活用できるようにサポートしている。

「Iターン者は研修中や新規就農後、地域に根づく前に辞めてしまうことが多いのです。貴重な担い手候補を育成するため、Iターンの研修生を受け入れられている担い手とも協力し、サポート態勢を築いています」(森脇さん)

島根県浜田市で米とブドウを栽培する担い手の藤若将浩さん(42)は、現在Iターン研修生を受け入れている一人だ。「T A Cは、わたしの農業経営や資材購入時の相談に乗ってくれているだけでなく、研修生にも勉強会や各種補助制度の案内をするなど、わたしでは対応できないことをフォローしてくれるので心強いです」

と、T A Cに厚い信頼を寄せている。藤若さんの下で学ぶ研修生が、大阪からのIターン就農をめざす西川正恒さ



「Iターンの研修生は非農家出身がほとんど。そのため、一つ一つを丁寧に教えることがだいじ」と藤若さんや森脇さんは話す

その先の展望までを語る西川さんにたいし、藤若さんはこう話す。「ブドウは棚を作って収穫できるまで、二〜三年はかかる。それまでは園芸作物も組み合わせないと生計は立てられない。T A Cには、新規作物の栽培提案をはじめ、融資などお金にまつわる情報もつないであげてほしい」

新規就農者を担い手へと育てあげるのもT A Cの役割の一つだ。研修生の独立後のサポートにも期待が寄せられている。